

# 「生と死」を 思わざるを得なかった日々



鳥越俊太郎  
「ユースの職人」

先日私の友人が脊柱管狭窄症で手術を受けた。全身麻酔が初めてで、不安だという。そこで私は言ってやった。

「麻酔学はものすごく進んでいるんだって。あんまり心配しなくていいんじゃない？」

こういう時には自分の体験を話すに限る。私は全身麻酔の手術を10回受けている。

- ①難聴解消のための内耳の手術
- ②大腸がん摘出手術
- ③左肺への転移摘出手術
- ④右肺への転移同
- ⑤肝臓への転移同
- ⑥胃のGIST摘出手術
- ⑦脊柱管狭窄症手術
- ⑧同上
- ⑨同上
- ⑩同上

ちょっと見ただけでも難解そうな手術。

この17、8年で全身麻酔の手術を10回、「大変だったろうな」

先ず皆そう思うだろう。

だけど本人からすればもう慣れたもので、手術の準備から、どこで眠ってしまって、気がついたら点滴処理があるなど手順は全部分かっている。こんなことを言うと辛い思いをした患者経験者に怒られそうだが、私には毎回どこか景色の違う遠足に行く気分だった。

そんな私でも厳然たる死の前でたじろいだり、参ったなと呟いたこともあった。

65歳の夏、大腸の内視鏡でS字結腸から直腸に入ったあたりで30ミリ程度の腫瘍が見つかった。

忘れもしない。虎の門病院、消化器外科のまだ若かった横山先生が大腸内視鏡の映像を見ながら言った。

「ああ、これはがんですね、すぐに手術し